第十八回ふくふく童話大賞「大賞」

ピッ　チャン　ポン

雨の日は、たっくんの好きな日でした。

きまってお母さんが会いにきてくれるからです。それも、公園のはずれにある一番大きな木の下で待っててくれる約束でした。

雨がふると、公園のベンチのそばにうすく広がった水たまりができました。そこで、お母さんとたっくんのピッ　チャン　ポンがはじまるのです。

「給食　全部　食べたかな」

「ピッ　チャン　ポン」

水たまりの中で、長ぐつをはいたたっくんとおかあさんが跳びはねます。

「ピーマン　きらい　のーこった」

「ピッ　チャン　ポン」

おうちや学校でのできごとを、たっくんとお母さんはピッ　チャンポンにあわせておはなしします。

たっくんは一年生です。

半年前にお母さんといっしょに暮らせなくなってから、たっくんはとつぜんおはなしができなくなりました。なぜだかきゅうに声がでなくなったのです。

でも、ことし小学校へ入学の予定だったので、お父さんはたっくんをつれて学校へ行きました。耳はだいじょうぶ、先生やみんなのはなすこともわかるので、そのまま学校に通ってもよいことになりました。

入学の日からずっと、雨が降りつづいていました。

お父さんはお仕事で忙しいので、たっくんはひとりでかさをさして学校から帰りました。とちゅうで、公園のベンチのそばに水たまりを見つけました。お母さんといっしょにお買物のかえり、水たまりを見つけては、ふたりでピチャピチャはねてあそんだことを思いだしました。

水たまりのはしっこを、長ぐつの先でふんづけました。
すると、ピッという声がしました。
たっくんはおどろきましたが、もう一回、こんどは左のくつでふんでみました。
チャンという声がきこえました。
あれっと思って顔をあげると、
「ポン」
といって、かさをさしたお母さんが水たまりの中にとびこんできました。
「お母さんだ」

ジャブジャブしぶきをあげながら、たっくんはかさを投げだしてお母さんにしがみつきました。

「どこいってたの」

泣きながらたっくんは言いました。

「たっくん、ほら声が出てる」

お母さんもかさをほおりだして、たっくんを抱きあげました。いっぱいほおずりして、たっくんがくるしくなるくらい強く抱きしめました。

お母さんといっしょだと、たっくんは声をだしておはなしができました。リズムをつけてちょうしをつけると、もっとうまくいきま

した。

「となりの　フースケ　元気(げんき)かな」

「ピッ　チャン　ポン」

「三匹(さんびき)　子(こ)ネコ　うまれたよ」

「ピッコに　チャンコに　ポンコだね」

はねまわって、ふたりとも息(いき)が切(き)れました。

「タイムだよ」

お母(かあ)さんはぬれたベンチに腰(こし)かけて、たっくんをおひざにのせました。

お母さんのうでの中で、たっくんは胸があったかくなるのを感じていました。

青やピンクのあじさいの花が、公園のところどころで咲き始めていました。

雨の中で一時間、これは最初にお母さんと約束したことでした。だからきょうはもうおしまい。たっくんはひとりでおうちへ帰る時間です。

「ずっと雨だといいな」

「あしたは晴れるけど、たっくんのたんじょう日は雨だから」

「ほんと、でもどうして知ってるの？」

「お願(ねが)いしたから」
「だれに？」
「神様(かみさま)に」
「きっとだね」
「そのかわり、あした学校(がっこう)へ行ったら、声(こえ)をだしてあいさつしてみてね」
「できるかな」
「お　は　よう、　ピッ　チャン　ポン」
「ピッ　チャン　ポン、お　は　よう」
ふりかえると、お母(かあ)さんはもういませんでした。

お母さんと呼ぼうとして、たっくんの声はまたでなくなっていました。

お母さんのいったとおり、つぎの日は晴れでした。そのつぎの日も、つぎの日も、それからしばらくたっても雨は降りませんでした。

とうとう、たっくんは公園へ行ってみることにしました。ぬかるみや水たまりはひとつも見あたらず、土はからからにかわいていました。

・・ぼく、お母さんに会いたい

声にならないで、心のなかでさけびました。

さびしくて、いつも持ち歩いていたかさを思いきりベンチに投げつ

けました。

そのとき、ポタッとひとしずく、空からおちてきました。ポタッとまたひとつ、たっくんの頭のうえにも落ちてきました。

ポタッ　ポタッ　ポタタタッ。

雨が降りだしていました。

たっくんはベンチのそばに水たまりができるように、雨のしずくを手のひらに受けとめては足元にこぼしました。早く早く、お母さんがこられるように、と心がはやりました。

バシャと大きな音とともに、たくさんの水が落ちてきました。

見るとお母さんが、かさをさかさまにして中にあった水をこぼして

いました。
「ほら、もう水たまりができちゃったね」
「ね」
たっくんはうれしくて、そう言うのがやっとでした。
「ごめんね、たっくん」
お母さんはそっとつぶやきました。
「たっくんのかささん、痛かったかな」
「ごめんね、かささん」
たっくんはかさをなでながら言いました。
「ピッ　チャン　ポン、あ・し・た・のたんじょう日、たっくん

ほしいの　なんだろう」
「お　母さんの　カレーライス」
「お　父さんのも　おいしいよ」
「お　母さんと　お　ふ　ろ」
「お　父さんも　たのしいよ」
「・・お母さんがいいもん」
たっくんの目は今にも泣きだしそうにうるんでいました。
「タイム」
お母さんはたっくんを抱き寄せて、ベンチに腰かけました。
「はい、これ」

お母さんはいつのまにか手に持っていた、革でできた犬の首輪とリードをたっくんに差しだしました。
「名前はジュン、六月に生まれたから」
「犬の名前？」
「今日お父さんが連れてくるわよ」
「ぼくんちで飼ってもいいの？」
「たっくんがひとりでめんどうみてあげられるなら」
「ここにも連れてきていい？」
「雨の日は、お母さんといっしょにあそぼ」
「ピッ　チャン　ジュン」

たっくんが跳びあがると、しぶきがひときわたかくなりました。
たっくんのお父さんは、公園をみわたせる木のかげからたっくんのようすを見ていました。声をだしているたっくん、うれしそうにしているたっくんを見るのはひさしぶりのことでした。
会社を早めにきりあげて、ペットショップへ寄り、明日のたっくんのたんじょう日にあげるつもりの子犬をひき取って帰るところでした。かごの中の子犬は、はじめてみるたっくんのほうにむかって、しきりにしっぽを振っていました。
少しずつ、たっくんが声をだすようになってきたことを、お父さんも気づいていました。だんだんよくなってくると、お医者さんが言っ

てたとおりだと、思っていました。いま、公園のベンチで、たっくんがだれとおはなししているのか、どうして元気をとりもどしてきたかを、お父さんははじめて知りました。

お母さんのすがたは、たっくんにしか見えません。たっくんのお母さんは、とつぜんの事故でなくなったのでした。でも、お父さんにはわかりました。お母さんが声のでなくなったたっくんのことを気にかけて、ときどきこうして会っていたのだということを。

「あしたはジュンを連れて、お母さんと三人でピッ　チャン　ポンをしよう」

かごを開けると、ジュンは雨の中をたっくんめざして、駆けていき

ました。

お母さんがほほえんで、こちらに向かって手をふっているのだと、お父さんは、思いました。

（秋元　さなえ）

マサおばー VS ヤールー

「あり、あり、またこんなところにヤールーのうんこが落ちているさあ」

「はーなぁー、また掃除しないと。なんぎやっさぁー」

「次はどんなわなでヤールーを取るかねぇ、何かいいアイデアはないか、あき坊にも聞いてみようかね」

マサおばーは今日も独り言を言いながら、白と黒のヤールーのうんこを掃除していた。

※ヤールー…「やもり」のこと。

そのころ、マサおばーの家の屋根裏では、ヤールーの頭ウフヤールーを囲んで六匹のヤールーたちが集まっていた。
今年に入ってもう四匹の犠牲者がでている非常事態なのだ。これ以上の被害を出さないためにどうしたらいいのか話し合いをしていた。
「俺たちは何も悪いことをしてないぜ。なのに、この家のマサおばーは俺の姿をみただけでハエ叩きを手におきかけてくる。まぁ、マサおばーの足じゃ俺様に追いつくわけはないけどな。でも頭にきたからうんこを落としてやったさ。ざまぁみろ」
仲間内で一番元気なハマヤールーが言った。
「俺も台所へ水を飲みに行っただけなのに、おばーに殺虫剤をかけ

られて窒息しそうになったよ。逃げ延びてホッとしたとたん気が緩んでうんこを落としてしまった」といつも台所をウロウロしている太めのマンマールーが言った。

「みんなも知っているでしょう。冷蔵庫の裏は暖かくて気持ちいいんです。だからそこで昼寝をしようと思ったら、ネバネバシートが仕掛けられていたんです。先に張り付いてしまったハールー君がいなかったら危うく僕がはりつくところでした。ハールー君が『危ない。ここへ来たらダメだ』って大声で教えてくれたから僕助かったんですよ。かわいそうにハールー君は身動きできずにそのまま干からびてしまったんです。僕とてもかなしかったです」

やさしいウムヤールーが言った。
「僕は歌が好きだし、ヤールー仲間の中でも歌が上手いでしょう。だからいつもチッチー、チッチーって歌っているんだけど、僕が歌い始めるとマサおばーがうるさいなーと言うんです。きっとマサおばーは音痴なんだと思います。先日、マサおばーの歌を聞きましたけど、聞けたものじゃない。耳がこわれそうになりました」
と歌うことが大好きなウタヤールーが言うと
「僕はお風呂場でボーっとしていたら、いきなり熱いお湯をかけられちゃって、僕らって身体に毛がないじゃないですか、肌もツルツル、スベスベだからすぐ火傷しちゃったんです。ほらここんところまだ赤

く腫れているでしょう。僕もあまりの熱さにびっくりしてうんこをちびっちゃいました」

ダルヤールーが赤く腫れたお尻を見せながら言った。

「俺たちヤールーは争いごとを好まない平和を愛する動物だ。だから牙もないし、尖った爪もない、武器になるようなものは何もない。でも、マサおばーにこんなに攻撃されて黙っているわけにはいかない。俺はもっとうんこをしてマサおばーを困らせてやるぞ」

ハマヤールーが鼻息も荒く息巻いた。

「俺は台所でしてやる。」マンマールーが言うと

「僕もハールー君の敵を打ちます。こんなことしたくはないけどハ

ールー君のためにうんこをします」
といつもはやさしいウムヤールーも小さな声で言った。
みんなが僕も俺もうんこをすると言い出した。
今まで黙って聞いていたデキヤールーが口を開いた。
「みんな待て、俺はこの間、マサおばーと孫のあき坊が話しているのを聞いたけど、おばーは俺たちヤールーが嫌いなわけじゃないんだ」
「じゃどうして、お湯をかけたり、殺虫剤で俺たちを苦しめたりするんだ」
とハマヤールーが問い詰めると

「まぁ、マサおばーとあき坊の話を聞け」
とデキヤールはその時の様子を話し始めた。

「おばー　ヤールーは、やー（家）を守るからヤールーって言うんでしょう」
「そうだよ」
「なのにどうしておばーはいつもヤールーと戦っているの。ヤールーを見つけたらぜったい逃がさないって言っているよね」
「だからよ。おばーも本当はこんなことしたくはないわけさぁ。でもよ、あいつらはどこにでもうんこするさぁね。それがだめだばぁよ。

この間もおばーは台所でヤールーのうんこ踏んでしまって大変だったよぉ。本当は害虫とか食べてくれるから助かっているところもあるけどねぇ。やーの中でうんこしなければおばーもあんなことはしないよぉ」

「どうにかしてヤールーたちが家の中でうんこをしないようにできないかなぁ」と言いながらあき坊は天井を見上げた。

「あき坊とマサおばーはこんな話をしていたんだ。マサおばーも俺たちが嫌いなわけじゃない。それにこの家は俺たちの死んだじいさんや父さんたちが守ってきた家なんだぞ」デキヤールーが言った。

「マサおばーは怖いけど、この家は昔の瓦葺きの古い家だから風通しもよくて、住み心地もいいしね。屋根の上のシーサー君もいいやつだよ」

とウムヤールーが言った。

「そうだね、最近のコンクリートの家は僕たちヤールーにとっては住みにくい。クーラーの中に入ってしまって、出てこられなくなったヤールーもたくさんいるんだって。その点、マサおばーの家はクーラーがなくても家の四方が開いているから涼しい、どこからでも僕たちヤールーが出入りできるなんて最高だよ」

とダルヤールーが言った。

「あき坊も俺たちのことを考えてくれているようだし、俺たちもみんなでマサおばーとうまくやって行く方法を考えてみるか」
と頭のウフヤールが言った。
「俺たちを眼の敵にしているあのマサおばーと仲良くやっていけるとは俺は思えないな」とハマヤールーはあきらめ顔で言った。
「でもよ、マサおばーは俺たちが嫌いだって言ってるじゃない。俺たちのうんこが嫌いだって言っているんだ」デキヤールーが言うと、
「そうだな。問題は俺たちのうんこなんだ。食べなきゃうんこ出ないんだが、俺たちも食べなきゃ生きていけないし、食べるとうんこはするし、どうすりゃいいんだ」

とマンマールーが言った。
「それって、うんこする所を考えたらいいんじゃないか」
とダルヤールーが言った。
「家のどこにでもうんこを落とすから、マサおばーが怒って僕たちをハエ叩きで叩いたり、殺虫剤をかけたりするんだ。僕たちが家の中でうんこをしなければ、マサおばーも僕たちを追いかけまわすこともない。ということは家の外でうんこをすればいいってことなんだ」
「そうだ、外って言っても玄関や縁側の近くはだめだぞ、玄関はマサおばーが毎朝掃き掃除しているし、縁側はとなりのヨシおばーと一緒に毎日三時茶―を飲んでいる。そんな目立つところだとマサおばーに

見つかる」
とデキヤールーが言うと
「台所の庇のところはどうですか。あそこは地面が芝生になっていて、僕たちの白と黒のツートンカラーのおしゃれなうんこも目立たないと思いますよ」
とウタヤールーが言った。
「そうだな、あそこはいいかもしれない。あそこは庇があって雨にぬれることもないし、渡っていける梁もたくさんあるから安心してうんこができるな。みんなこれからは家の中でのうんこは禁止だ。マサおばーの目につくところではうんこはするな、いいな。俺たちがこの

家で暮らしていくならマサおばーと仲良くするんだ。わかったな」
と頭のウフヤールーがみんなに向かって言った。
「そんなことであの凶暴なマサおばーの攻撃がなくなるとは思えねぇが、まぁ、しばらくはみんなにつきあってやるよ」
とハマヤールーが言い、他のみんなは頷いた。

日曜日の午後、あき坊が遊びに来た。
マサおばーは機嫌がいい。
「おばーは今日も元気だね。それにいつもより楽しそうだよ。何かいいことでもあったの」

「あい、あき坊よく来たね。最近、ヤールーのうんこがないんだよ。みんな引っ越したのかねって思ったさ。家を守るヤールーがいなくなったらさみしいねぇって思っていたら、昨日の夜、チッチー、チッチーって鳴き声がしたさぁ。前はうるさいなぁって思ったけど、昨日は鳴き声を聞いて、おばーはなんだかホッとしたよ。やっぱりヤールーは家とおばーを守っていたんだね。これからはおばーもヤールーを叩いたりしないさぁ」

ヤールーたちはマサおばーとあき坊の話を屋根裏で聞いていた

「昔はうんこなんて、どこでもできたのになぁ。俺たちもマサおばーの家にお世話になっていることだし、おばーの嫌がることはしちゃ

ーならないなってことだな。
みんなの中で生きていくってことは、がまんしなければならないこともあるってことだ」
と頭のウフヤールーが言った。
今度はひねくれもののハマヤールーもみんなと一緒に頷いた。
この話を屋根の上で聞いていたシーサー君が青空を見上げて笑っていた。

（具志堅　都）

少年海人アハゴン・アキラ

ボクのなまえはアハゴン・アキラ。

ボクはきょうから海にでる。

いつもより三じかんも早おきだけどすこしもねむくはない。

よあけの海をサバニはかいちょうにはしる。せきらん雲がオレンジ色にかがやいている。

海をみているともうどうしようもなくわくわくしてくる。ボクにもこれはとめられない。あおい水がからだにはいりこんできてボクをい

※サバニ…漁業に使用する沖縄の伝統的な小船。

らいらさせる。ああ、はやく海にもぐりたい。
ボクはサバニといっしょに波にのる。
しお風と波しぶきが顔にぶつかって、いたくて気もちいい。しおっからいけど、あまくもある。
サバニは目ざすサンカクビシについた。
ここでボクがいまやっきになっているのはゲンナーだ。それもとくだいのヤツ。このいっしゅうかん、まいばん、ゆめにまでみた。
夏やすみをまちきれずにボクはせんしゅう、ここにやってきた。そしてそのゲンナーをみつけたのだ。

※ゲンナー…ナンヨウブダイのこと。イラブチャーとも呼ばれる。

そいつはじぶんのねぐらににげこんで、オビレだけをすこしのぞかせて、でてこなくなった。サンゴの岩の下から、ボクをちょうはつするようにヒレで水と砂けむりをおくってきた。

サンカクビシのはしっこに、トラックぐらいのおおきなサンゴのかたまりが、いくつもゴロンところがっているところがある。その下がヤツのすみかってわけだ。

こんなにおおきなゲンナーははじめてだ。もちろんヒローサーとはちがう。

ボクはこのサンゴの岩の上にアンカーをおろし、水面から海のよう

※ヒローサー…メガネモチノウオのこと。ベラの仲間では最大種。

すをかんさつする。

しばらくすると、ひとつのおおきなあおいカゲがあらわれた。そのあおいカゲはゆらりゆらりとすすみ、すっとサバニの下をとおりすぎた。ボクはあわててはんたいがわに身をよせた。

ボクは音をたてずに、ゆっくりと水にすべりこむ。イーグンを片手にあたまを海底にむけてすすんだ。アシヒレをゆっくりと、けるる。つよく、つよくける。耳ぬきをしながら、すいちょくにもぐる。底についた。

こんどはゆっくりといきをはきながら、水のなかでボクはたちあが

※イーグン…銛（もり）

る。

うちゅうゆうえいだ。ヤツのあとを目でおった。おおきなあたまのヤツはサンゴや石にはえた小さな海そうを石ごとかじっては、サンゴのかけらをはきだし、しろい砂のフンをしている。

いま、食事にむちゅうだ。

ボクはひとこきゅういれると、ふたたび、ふかくもぐった。ヤツからはみえない、岩のはんたいがわから、ねらうつもりだ。ボクは砂けむりをすこしあげてふわりとたちあがり、ヤツがふりむいたしゅんかんをねらって突いた。だが、イーグンはやわらかいサンゴに突きささっただけだった。サンゴのかけらがぼろぼろとくずれおちていった。

でもかすったようだ。おおきなウロコがいちまい、かがやきながらただよっていた。

ボクはおった。オトウのいちばん長いイーグンをもってしても突けなかった。くそ、ボクはとてもくやしい。

ひとこきゅういれているうちに、ボクはゲンナーをみうしなった。あたりをみわたす。

そのとき、ボクは海の底でヒカルものをはっけんした。それはどこかのダイバーがおとした水中ナイフ。このビシまでダイバーがきているなんて、ボクはすっかりいやになった。

ボクのだいすきな海がしらないだれかにうばわれる気がした。でも

こいつはせんりひんだ。かえばたかい。もらっておこう。このとき、そんなケチなかんがえをおこさなければよかったんだ。でももうおそい。

いちどサバニにもどるとボクはひろったナイフをみがいた。ナイフはきらきらと太陽(たいよう)にはんしゃした。なんだか、たからものをひろったみたいでうれしくなった。ほんとういうとほしかったんだ。だれもみていないのにすこしとくいになって、ボクはそれを首(くび)からさげて、海(うみ)にとびこんだ。ゲンナーのことをすっかりわすれてしまった。

ボクは水面(すいめん)でそれをキラキラさせていた。しおがとまり、海(うみ)はかがみのようにおだやかで、それは水平(すいへい)せんまでつづいていた。あたりは

ぶきみなほどにしずかだ。
そのとき、小さな魚のむれが水面をはねた。
あおじろいイナズマがこっちにむかって、もうスピードではねてくるのがみえた。
ボクはめまいをおぼえた。
はげしくなにかがぶつかった。からだに、つよいしょうげきがはしった。
いたい！
どこがどうなったのかわからない。気がつくと胸のあたりから血がふきだしていた。しんぞうがドキドキと、なった。

一メートルをこえる巨大なダツがまっしぐらにボクにむかって突きすすんできたのだ。

あのするどいアゴでボクは突かれたのだ。

ボクはひっしになってサバニにしがみついた。でもすこしのあいだ、気をうしなった。からだがしずんでいく。

気をとりなおすと、ボクはふるえながら、アシヒレをける。ふたたびサバニに手をかけた。いたみがはげしくてとてもサバニにはいあがれそうもない。

もたもたしているうちに、もっといやなことがきた。そう、わるいことはかさなる。

ボクの血のにおいをかいで、もっとふかいところにいた、きょうぼうな生き物がちかづいていた。みえないあおい水のむこうから、灰色の生き物がじょじょにちかづいてきている。かたちがすこしずつはっきりとしてきた。

ボクのこころにあらたなきょうふがはしった。ボクはパニックにおちいった。

こんなときにかぎってサメがくるなんて。こん身の力をこめてボクはサバニにはいあがろうとした。けれど、手がすべった。もがきながらそのまま海にしずんでしまった。

もがいているうちにこんどは足がつった。アシヒレをけることさえ

できない。

サメが、しずんでいくボクにねらいをさだめた。くっと、むきをかえた。それはこれからおまえをこうげきするぞ、というサメの合図だ。血の気がからだからひいていく。じぶんをうしないそうだ。

ボクは死ぬんだ、そうはっきりおもった。

わずか数びょうのあいだにボクのあたまのなかを、そうまとうのように、おもいでがかいてんした。なぜか家ぞくみんなで朝ゴハンを食べているこうけいばかりがうかんだ。

そうだ、死にたくない。生きてしたいことがある。家ぞくみんなで朝ゴハンをたべたい。ごちそうでなくていい。いつものヤサイいため

でいい。ボクのねがいはただそれだけだった。どうしてもそうしたい。そうおもったら、とつぜん、からだじゅうに力がわいてきた。

ボクはナイフを手にした。ぜったいぜつめいなのに、ものすごい勇気がわいてきたんだ。

よーし、おそってきたら鼻さきを突くんだ。

ついにサメはむかってきた。

ボクはナイフを突いた。でももう、いきがきれそうだ。

むねのあたりにはしる、はげしい、いたみ。あたたかい血のかんしょく。ひきつっていないほうの足でボクはヒレをける。やっと水面にでていきをつなぐ。

サメはすこし、きょりをおいて、ボクをみている。ボクはとっさにサバニにもどろうとこころみた。ふばべりをつかんでこんどこそいっ気にはいあがろう。でも力をいれても力をいれてもむりだった。

ボクはふたたびすべりおちた。もはや手にナイフはなかった。おとしてしまった。

でも、こころはけっしてくじけていなかった。ボクはサメをにらみつけた。

そのときだ。

あのサンゴの岩の下からゆっくりとゲンナーがでてきた。おおきさはサメとかわらない。あたまはもちろんゲンナーのほうがおおきい。

どうどうとした、あおくかがやく魚(さかな)だ。
どういうわけか、ゲンナーはものすごいいきおいでサメにむかっていった。おおきなあたまが突(とつ)しんした。
サメはおどろいたようすであとずさり。
サメがまたむきをかえて、こうげきたいせいをととのえた。だが、ゲンナーはふたたびむかっていった。こんどはボクのすぐうしろをまわって、泳(およ)いでいったので、水(みず)がよってきた。まるでボクをまもろうとするかのようだ。
ゲンナーがたたかっているあいだに、ボクはすこしずつ元気(げんき)になっていた。

ボクはサバニにしがみついて、ふたたびはいあがろうとした。こんどはあせらずに、ゆっくりとしんちょうにはいあがった。

サバニにたおれこんだ。

それから長いあいだ、気をうしなっていたかもしれない。気がつくと血はとまっていた。太陽は空のまんなかをすぎていた。大きなケガではなかったようだ。でもいたみは、はげしかった。これはダツの歯が、からだのなかにのこっていて、そのドクのせいだ、とボクはおもった。からだのふるえがとまらない。海をのぞきこむと、あおいカゲがすっとうごいた。

ボクはそのカゲにむかった、ありがとう、とつぶやいた。

それからやっとのことで、港にむけて、サバニをはしらせた。ボクはその夜、病院のベットの上で、きょだいなダツが夜空にかがやく三日月にむかってとびあがっている、ゆめをみた。

そうだ、きっとあのダツはナイフのひかりにみせられたんだ、ボクはそうおもった。

はやくケガをなおしてゲンナーにあいにいこう。

（大浜　弘）

※海人…漁師のこと

後生バーレー

明け方の港町にハーレーが近付いたことを知らせる鐘が小高い丘の上から鳴り響いた。

学が、毛布の中でぐずぐずしているとオバーの怒鳴り声が聞こえた。

「マナブーだらだらしないよー。ご飯食べて学校にいかんと。オジーも元気出して海に行ったらいいのに。もうすぐハーレーだよ」

あきれた声を残してオバーは出て行った。魚市場にまた戻るのであ

※ハーレー…爬龍船競争（ハーリー）の、糸満での伝統的な呼び方。

る。オジーは、いつものように仏壇のそばの柱にもたれ座っていた。学は、オバーが準備した朝ご飯を食べた。

目の前に下がっているバスケットのユニフォームを見ながらため息が出てきた。ゼッケン四番。キャプテン。ずっとあこがれていた物が今は重荷になっていた。ボッー、としていると、オジーがもたれている柱の時計が午前八時を知らせた。あわてて、ランドセルをひっかけ、いつものように『いってきます』と仏壇に飾られた父の写真に手を合わせ家を出た。

学の父のミノルは海で亡くなった。父がどのように亡くなったかは知らない。海人であったオジーは、その時からばったり海に出な

くなって、柱にもたれトゥルバッテイル。

母が大阪に再婚していったのは父の三年忌を終えた頃である。それから毎年誕生日には大阪からプレゼントが贈られてきた。

バスケットを始めたのは「父さんのようにたくましい子になれ」と添え書きされたバスケットシューズが母から贈られてきたのがきっかけであった。ブカブカだったシューズが学の足にピッタリになった六年生になって、キャプテンに指名された。学の父と同じチームでプレーをしていた監督は

「お前を息子のようにおもっているからな」

と誰よりも、厳しく学を指導した。

「なぜ、バスケット部なんかに入ってしまったんだろう」
シューズを贈ってくれた母の思いと仏壇の父の笑顔が学を苦しめた。
「今日こそ、バスケット部をやめよう」
と学は決心をして校門をくぐった。
授業の終わりを知らせるチャイムがなった。学も、みんなが集まっている体育館に向かった。途中四年生の後輩たちが近づいてきた。
「学キャプテン今日の試合頑張って下さい」
と声かけられ
「うるさいなー」
と怒鳴ってしまうと、後輩達はびっくりしたように走り去っていった。

取り残された学は、四年生を怒ってしまった自分が情けなくなった。

「キャプテンおそいよ。早くみんなを集めないと」

と副キャプテンの康二が口をとがらせた。『お前がやればいいだろう』と言う言葉を飲み込み、従った。学は名ばかりのキャプテンで、いつも指示を出しているのが康二である。自信を持って、ドリブルやシュートをしている康二に比べ、学はおどおどしていた。試合になると、敵にボールをパスしてしまうへまを繰り返した。誰よりも多く練習をしているはずなのにその成果が現れてこない。特に試合になるとさんざんであった。

今日の試合も学の名前はスターティングメンバーになかった。

最近は、試合に出たい思いよりも試合に出て失敗をする事の方を恐れていたのでホッとした。学はゼッケン四番の背中を小さくしてベンチに座っていた。

試合が終わり学は退部を申し出た。監督は

「お前の父さんと母さんはどう思うだろうか」

と言った。学が黙っていると、監督は続けた。

「オバーに心配かけるなよ。お前のために一生懸命頑張っているのだから」

これまで、何度も聞かされた言葉にうんざりした。学は、バスケットボールをやめた。

旧暦五月四日に町はハーレーの本番を迎えた。神人の拝みが終わり、ハーレー鐘が打ち鳴らされた丘の上で旗が振られ、いっせいに櫂が動く。ウガンバーレーから祭りが始まる。太鼓をたたく女達が腰まで海に入りこぎ手を応援する。若者は、ドラにあわせて必死にこぐ。サバニが波を切る。学は熱心に応援するでもなく、ぼんやりながめていた。オジーは相変わらず仏壇の前だった。そして、祭りはあっけなく終わった。

その夜、玄関のドアを開ける音で、学は目が覚めた。オジーの寝床は空っぽだ。学は、オジーの後を追いかけた。

夜の港は、昼間の祭りの歓声をあたりの空気の中に閉じ込めてい

るかのようだ。家から出ていったはずのオジーの姿は見えない。そのかわり何年も岸壁につながれたままになっていたオジーのサバニが海に浮かんでいた。

「オジー、オジー」

と呼んだが、月のない真っ暗な海からは、波の音だけが聞こえた。学は目の前のサバニに乗り込み、海へこぎ出した。陸に向かっているのか、沖に向かっているのかわからず、闇の中にすっぽりと飲み込まれていた。居場所を確かめようと立ち上がったとき大きくサバニが揺れ海に落ちてしまった。学はひっしにもがいたが記憶が薄れていった。

気がつくと怒った表情のオジーがいた。
「何でついて来たかぁ」
「オジーのことが心配だったから」
「お前も父ちゃんとそっくりだなぁ、ほらあそこにいるのがお前の父ちゃんだ。お前とオジーがいるところは、そうだな。この世とあの世の境目かな。しかし、困ったことになってしまった。後生にお前まで連れて行くわけにはいかない」
学の父を乗せた船がスタートの合図を待っているのが見えた。今まさに後生バレーのまっただ中にいた。学が住んでいる町では、ハーレーが行われた夜は絶対に海に行ってはいけないことになってい

た。それは、海で亡くなった人々が集まって後生バーレーをすると伝えられていたからである。オジーは戻らないつもりで息子に会いに来たのだ。

学は確かにおぼれた。今まさに、死にかけているのだ。

なぜか静かな、ハーレーだった。そこには音がなく動きだけがあった。服装もバラバラだった。死んだときのそのままの服装だ。漁師もいる。兵士もいる。若者も年寄りもいる。時代がバラバラだった。オジーの視線の先には、ミノルの姿があった。

「ミノルはオジーの代わりに向こうにいるんだよ」と独り言のように言った。

オジーは、自分に言い聞かせるように続けた。

「あれは、台風が近づき、海が荒れ始めた日だった。仲間の船がみんな港に引き上げるのを見ながらまだ大丈夫だと漁を続けた。心配したお前の父ちゃんは周りの制止をふりきって海へ探しに出たそうだ。そして、お前の父ちゃんはもどらなかった。変わりにわしは、小さな島にたどりついて生きのびてしまった。わしがミノルを殺したようなものなんだよ」

「何を言っているか」

突然、隣の老人が大きな声を出した。おじーは目を丸くして叫んだ。

「スー（お父さん）」

オジーに似た老人は、オジーの父親だった。

「誰がお前を呼んだ。呼ばれもしないのにここに来るな。よりによって、ひ孫まで連れてくるとは、けしからんじゃないか」

親父に叱られるオジーを見ながら、仏壇に飾られた軍服姿の写真の人を学は思い出した。つまり、学のひいオジーと言うことになる。

目の前では、三艘の舟が競争をしていた。一番前を走る船の先頭に父さんの姿はあった。父さんの櫂は、力強く、たくましく波を捉えていた。父さんにあわせて他の人も櫂をこいでいた。監督の「父さんだったら何と言うだろう」と言った言葉を思い出した。たぶん何も言わない気がした。父さんのひたむきに船をこぐ姿を見てそれを

確信した。学の血の中に確かにあの人の血が流れている。

「学、いつもお前を見ていたよ」

ひいオジーが声をかけてきた。仏壇の中の人が話しかけてくるので変な感じはしたが怖くはなかった。写真のいかめしい表情とは違い親しみを込めたおだやかな笑顔だった。

「いつも手を合わせてくれてありがとうね」

目の前のひいオジーなら学の願いをかなえてくれそうな気がした。学の心を見透かしたようにひいオジーが言った。

「ご先祖様は魔法使いではない。はずれたシュートを入れることはできないよ。できるのは、学を見守るだけなんだよ。見守れていること

とを信じて祈れば、目に見えない力がわいてくるそれはもともと君の中にある力なんだ」

ひいオジーは、オジーに向かって言った。

「まだ間に合う。学を連れて戻りなさい。迎えは必ず来るから待っておくことだな」

その言葉にはオジーも従うしかなかった。

学は、がっしりとした大きな手に引き上げられるのを感じた。

「まなぶー。目をさましたかい。父さんに似てきたね」と声をかけてくれたのが母であることに気がつくのに時間はかからなかった。

「事故の知らせにびっくりしたさあ。とても心配したよ。オジーが助

けなければもうすぐ死ぬところだったんだよ」
母さんは、目をうるませほおずりをしてきた。耳元でささやくように「どうだったお父さん。会えたんでしょう。母さんも会いたかったなー。父さんかっこよかったでしょう」
忘れていたお母さんのにおいがした。一緒に住んでいなくても確かにつながっていた。
「母さんと一緒に大阪にいかないか」
と母は続けていった。
「学の勝手だよ」
とオバーが言った。二人に答える代わりに

「オジーのサバニで魚をつりにいきたいなあ」
とオジーに聞こえるように学は言った。
「そうするといいよ、オジー」
と母さんとオバーは、示し合わせたように声をあわせた。みんなの視線をあびたオジーは、静かにうなづいた。病室の窓からキラキラと光る海原が見えた。

（金城　毅）

※グソーバーレー…昔からの言い伝えで、海で亡くなった人たちが行うハーレーのことと言われている。